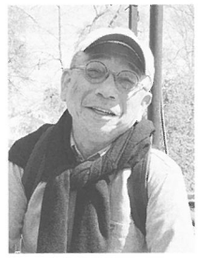
ウソは絵本・児童文学でどう描かれているか



発達保障研究センター元理事長　品川文雄

教員だった時、子どもたちと私のどちらが多くウソをついたかといえば、答えは簡単！　私です。今も4歳の孫に「言うこと聞かないと怖～いオニが来るぞ～」と脅かすイケナイ爺さんです。だって毒がなく、遊びのような楽しいウソのつきあいは人生を豊かにするから（おおげさだ～ウソだ～）。

そんな私も子どもの頃は親や周りの大人から「ウソをつくと閻魔様に舌を抜かれちゃうぞ」、「ウソつきは泥棒のはじまり～」とさんざん脅され、ビクついていましたが、大きくなるにしたがい「ウソも方便。時と場合によってウソも必要だよ」と考えるように。だからといって政治家の大嘘は許しませんが！！！　おっと脱線脱線。絵本・児童文学の中でウソがどのように描かれているのか、そこから何を学ぶのかを考えます。

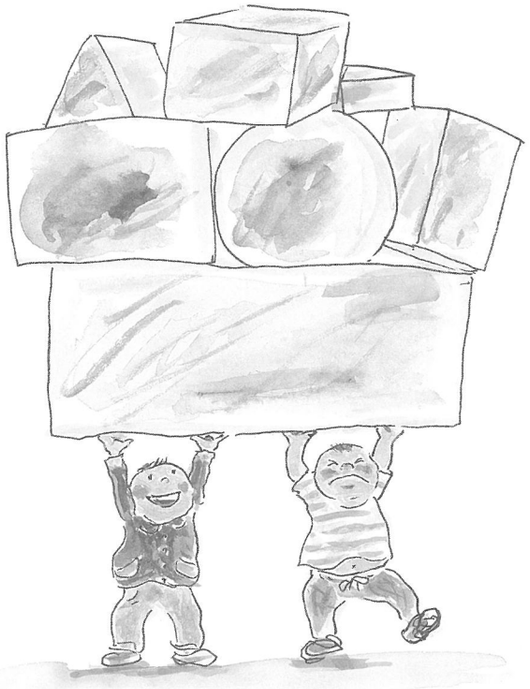
イソップ物語『オオカミ少年』考

ウソの物語といえば、イソップ物語の『オオカミ少年』でしょう。羊飼いの少年が「オオカミがきた」とウソをつき、騒ぎを起こす話です。村人たちは繰り返しウソをつく少年を信用せず、オオカミが本当に現れても助けに来ませんでした。そのため、羊が全部食べられてしまいます。ウソを繰り返すことで人からの信頼を失い、助けてもらえない教訓を示しています。村落共同体において、ウソをつかず正直に生きることを求めた人間像が生み出した物語だったのでしょう。

ところが、現代の『オオカミ少年』の読み方は異なります。ウソをつかない「良い子」に育てる教材として注目されているのです。あるコラムでは、「わが子を人から信頼される人間に育てたいと願うなら、大原則として『嘘は絶対にいけない』と刷り込むことが重要である」と述べています。『オオカミ少年』の読み聞かせのあと、「ウソばっかりついていると、本当に困った時、誰も助けてくれないよ」と脅しのまとめをしたら、内容が衝撃的なこともあり、その一言で低学年の子どもはみなうなずいたとのことでした。これで本当に良いのでしょうか？

私だったら子どもたちと次のことを話し合いたいと考えます。羊飼いの少年がなぜ「オオカミがきた」とウソをついたのか、いつもは誰からも無視され寂しかったのではないか、「オオカミがきた」と言った時だけは注目され、うれしかったのではないか。その少年の心の中はどうだったろう、孤独ではなかったのか、でもなぜ何回もウソをついてしまったのだろう、繰り返しウソをつけば見捨てられると考えなかったのか。

このように子どもたちと羊飼いの少年の心の中を話し合うことで、ウソをつくにも理由があることに気づき、その理由を自分は納得できるかを考え、自分が羊飼いだったら、ウソをついただろうかと考えさせたいと思います。ウソをダメなこととして切り捨てるだけでなく、ほかの人たちとどのような関係をつくり、人として大切なことは何かを考える機会にしたいと思います。



ヘェ～「ピノッキオ」は深い！

ウソをテーマにした絵本や児童文学は少ないと思っていたら、意外にあります。

ディズニー初期のアニメとして有名な『ピノッキオの冒険』もその一つです。ディズニー版は〝ウソをつく悪い子が良い子に生まれかわるマイルドな物語〟になっていますが、コッローディによる原作は産業革命が始まった1800年代末期イタリアで労働を強いられる子どもたちの窮状を反映したハードなものです。

相互に助け合い支え合っていた社会から近代産業革命の暗黒面に蹂躙（じゅうりん）されていく人々、とりわけ子どもたちの過酷な状況に対し、ピノッキオの物語を通して問題提起する原作者の思いが満ちています。

おすすめウソの本、ホントです！

ウソをテーマにした海外の絵本・児童文学を述べましたが、日本にはないの？　と突っ込まれそうなので、紹介します。

『えっ、ウソみたい？』（日本児童文学者協会編、偕成社）。「人間やめますか」（村上しい子作）など、6人の作家による短編集です。『うそ』（谷川俊太郎作・中山信一　絵、主婦の友社）。「うそが正しくないとか悪いとかいう考えはなくて、自分を信じられる視点や正解を持てれば、それでいいのではと感じます」と中山さんは言います。

私のウソの児童文学一押しは『ウソがいっぱい』（丘修三作、くもん出版）です。いろんなウソが出てきます。ウソとどう向き合うのか、それは人生をどう生きるかとつながります。そう！　これはウソの哲学の本なのです。主人公リュウは最後に言います。

「ウソをついて、自分がはずかしいと思うような…人をきずつけたり、うらぎったり、自分のつごうのいいような…（中略）…そんなウソは、できるだけつかないようにしたいと思う」

私も「そんなウソは…」と言いたいけれど、言いきれない未熟な私がいて…。ああ～悩む！

（しながわ　ふみお）